

子どもの友達関係で悩んでいる保護者との関わり

幼稚園の生活は、遊びが大半を占めます。5歳児になると友達との関わりも深まり、気の合う友達と共に遊び始めます。降園後もお互いの家を行き来し合うようなつながりが増えてきます。

しかし、子ども同士の関わりに保護者が入ってくると、微妙な感情のズレが芽生えます。そこから子ども同士の関係が、ぎくしゃくしたものになってくることがあります。

事例(1) 僕のお母さんね、I君のことを「泣く子は嫌い。」って言っているから

A君とI君は、4歳児の頃から一緒に遊ぶことが多く、仲良しの二人に見えました。ところが今年に入って、A君が、I君に「ついてくるな!」と言ったり「お母さんが『泣く子は嫌い。』って言うからI君だけきちゃだめ。」と言ったりする姿が見られるようになりました。

一度A君の保護者に話を聞こうと思っていた頃、A君の母親が相談にみえました。A君の母親は、「うちのAは、『I君にわざと引っかけられて転ばされた』『I君はいつも1番がいいと言って泣くから僕はもういやだ。』と言っています。」と話し始めました。その表情からも感情的な様子がうかがえました。しかし、担任からA君とI君の様子を見てみると、A君が家で母親に話しているようには見られませんでした。

「わざと転ばされた。」の一件では、二人にその場で聞いた時には、A君は「I君がぶつかったから僕転んじやったの。」と言っており、I君は「ごめんね、わざとじゃないけれど走っていきぶつかったの。」と泣いて謝っていました。

「I君は、いつも1番になりたがる。」の件では、A君とI君は、何かと張り合う時が多く、例えば保育室に戻ってくる時にお互いに「僕が1番だったよ。」と言いつつ、2番になった方が泣くという姿でした。しかし、A君ばかりにストレスがたまっているようには見えませんでした。そのため、担任は「なぜ、A君は家でI君のことを悪くいうのかな。お母さん自身の『I君をいやだ。』という思いがA君に伝わっているからではないかな。」と聞いてみました。

担任はそういう思いを抱いていたので、つい「幼稚園では、A君も同じように『僕が1番』と言っていますよ。」と話しました。転んだ時のことも母親の言い分に対して「二人は、このように(上記)言っていましたよ。」と説明しました。さらにはお母さんが『泣く子は嫌い』と言っていたことに対しては、「こういう断り方はあまりよろしくないですね。」とまで言っていました。

その後、A君の母親と担任との関係は、こじれてこじれてしまいました。母親は、担任の話に納得がいかないといった様子で、毎日のように「先生、うちのAがこんなことを言っています。I君をどうにかしてください。」と言いにみえました。父親もI君、I君の母親、担任の三人に対して、立腹している様子で、怒って幼稚園に抗議されました。

担任も、精神的に参ってしまって、どうしたらよいのだろうか、と同僚に相談しました。

そして、次のように保護者との信頼関係を修復して、問題解決の方向に進んでいきました。

1 先ずは保護者の思いを十分に聞く

そのときの注意点として、

- ア) 「先生とお話がしたいのです。」と言ってみえたら、電話よりは直接合って話すこと、そして園に来てもらうよりは、こちらから家庭に伺って話すことを心がけました。こうして「我が子のために担任が動いてくれている。」という信頼感をまず抱いてもらうことが大切です。
- イ) 担任が相手のお子さん（I君）をかばうような言葉がけをしてはいけません。今一番苦しんでいるのはA君の保護者であり、A君そのものであるとまず受け止めることを最優先にしました。

2 段階を踏まえた働きかけ

①「担任としてできる精一杯のことをさせていただきます。」という姿勢で話す。

----- A君の保護者 -----

「今すぐにでもA君からI君を遠ざけてほしい。」

----- 担任 -----

「一度給食や当番などのグループを別にします。私も一緒に遊びながらA君がB君のことを負担に思わないように二人の間に少し距離を置くように働きかけます。」

「子どもさん同士のことですから、すぐに離れていくことはできないかもしれませんが、お母さんとしてはもどかしいかもしれませんが、長い目で見ていてくださいね。」

----- A君の保護者 -----

「I君の保護者にも先生から指導して欲しい。」

「I君の母親は、ヒステリックに子どもを叱っているのではないか。だから、I君はよく泣くんだ。I君は、家でのストレスを、うちのAにぶつけているのではないか。」

「もしI君の母親が、うちの言い分が気に入らないなら、私からはっきり言ってケンカをしてもいいんだ。」(父親)

② I君の保護者とも一度ゆっくり会って話す機会を持つ。

その時、I君の保護者が担任に呼び出されたことで、ショックを受けられるかもしれないことを配慮しました。まず、I君の家での様子を聞きました。「最近A君との関係で何か言ってませんでしたか。」と尋ねました。それを聞いた上で、担任としてA君の母親の悩みに対して適切な対処ができなかったために関係がこじれてしまっているという事実を話しました。そして、I君の幼稚園での姿を話し

ながら、A君の保護者の思いについて触れていきました。

実際は、I君の保護者は二人目のお子さんの母親という余裕もあり、話を落ち着いて聞いてくださいました。我が子だけ家に呼んでもらえなかったことも、気にとめてみえたものの、I君が家で「今日、A君幼稚園来るかな。」と毎日登園を楽しみにして、そこまでA君と保護者が思っていたとは意外だったようです。今までの経緯を話したことで「勉強になりました。」と言われ、「家でもBは、すぐに泣くし、泣いて通そうとするけれど、私たちはそこはダメなものはダメと接している。でもおじいちゃん、おばあちゃんは、やはり甘いところはありますね。」と話されました。「しばらくは朝、幼稚園に少しの間時間いて、子どもの様子を見ています。」と言って帰って行かれました。

③担任だけで抱え込まず、幼稚園全体の教師に見てもらおう。

多くの教師に援助を求め、みんなで子どもを育てていく協力体制を作っていきましょう。そうすることで、担任が知らなかったA君とI君の関わりや、A君個人の「こんな楽しい遊びをしていたよ。」という話を聞くこともできました。担任も、いろいろな教師から保護者とのつき合い方についてのノウハウを聞くことができました。保護者自身も、他の教師から「今日のA君、こんな姿を見せてくれましたよ。」と聞くことができ、「うちの子は、皆の先生から見てもらっているんだ。」という信頼感を抱いてくれるようになりました。

④その後も、こまめにA君の保護者と連絡を取る。

降園時に、お子さんを迎えにみえた保護者に、教師から話しかける。

- ア) I君の保護者と会って話をしたことやI君の保護者が申し訳ない気持ちでいらっしやることを伝えました。
- イ) I君の保護者は、家でお子さんに「すぐに泣かないこと、『一番が、僕。』とこだわらないこと。」と話してみえることも伝えました。そして「しばらくの間、我が子の姿を幼稚園で見えています。」と言われたことも伝えました。
- ウ) I君が少しずつ変化してきたことを伝えました。「これからもA君の保護者が気づいたことがあったら、いつでも教えてください。」と伝えました。

保護者が子どもの友達関係で教師に訴えてみえるときは、その時点で、かなりナーバスな精神状態になっています。それを無視して「でも、幼稚園ではA君も同じようにI君に言ってますよ。」といった事実だけを伝えるような言い方をしてはいけません、母親の感情を受け止めていないと、解決の糸口を細めてしまいます。

まずは、「相手の思いを十分聞くこと」が基本です。担任がカウンセリングマインドをもって、保護者の話にじっくりと耳を傾けましょう。

事例(2) 私は、女の子と遊ばなくちゃいけないの。

K子さんは、誕生月が3月で月齢が遅いこともあって、年長児とはいえ他の子と比べると幼い言動が見られる女児です。

例えば、靴が片方見あたらないとき、「私の靴が一人いなくなっちゃったの。」と擬人化した言葉を使ったり、生活の中で遊びと片付けの区切りがつきにくく、「いやだ、もっと遊びたい。」と泣いて通そうとしたりする姿が見られました。年中児の時には、特定の友達がいなかったこともあって、毎日登園を渋り、遅刻することが多かったようです。

年長児になって、クラスの中でH君、Y君という友達のことを意識し始め、一緒にポケモンごっこをしたり、探検ごっこをしたりして遊ぶようになりました。この二人の男の子も3月生まれで、幼さの残る子どもだったので、K子さんとしてもほっとする空気を感じたのでしょうか。担任もK子さんが毎朝「先生、H君は？早く来ないかなあ。」と登園を楽しみにするようになったので、うれしく思っていました。

そんな折、K子さんの保護者が次のような相談に見えました。

「K子は男の子とばかり遊んでいるけれど、私はクラスの女の子といっぱい遊んで欲しい。このクラスの女の子は、自己主張をしっかりとできるので、女の子と遊ぶ方がK子も刺激を受けると思うのです。」

そのころから、K子さんが遊び始めるときに「私は、女の子と遊ばなくちゃいけないの。H君、Y君あっち行って。」と言い始めました。担任はこの様子を見て、K子さんが家で母親からかなり言われているのだな、と思い「何とかしていつてあげなければ。」と思いました。

1 クラスの皆で育ち合う学級経営を心がける

K子さんの目をクラスの女児に向けさせる指導ではなく、クラスの女児がK子さんに向いていくように担任が働きかける。

→担任

- ・母親に「女の子と遊びなさい。」と言われたことがきっかけとなり、K子さんが女児にも関心を持ち始めていました。そこで、担任が意図的に、グループ活動において面倒見の良いY子さんを同じグループにしました。
- ・飼育当番、給食当番などの活動を「グループ皆でそろって一緒にやろうね。」という言葉がけをし、お互いに助け合ってできるように働きかけ、励ましました。

2 K子さんの姿を通して、保護者に担任の思いや願いを伝える

① K子さんがクラスのいろいろな友達に関心が出てきて、関わりが広がってきたことを伝える。
その上で、遊びの中ではH君、Y君とも遊びたがっている様子を知らせる。

→担任

- ・ K子さんがうまく自分の思いを友達に言葉で伝えられなくて、もどかしく泣いてしまう姿を見ると、担任が「K子ちゃんは、こういう気持ちだったんだね。」「どうしてあげると良かったのかな。」とK子さんの気持ちを汲んでいくような言葉がけを女児の間でしてきました。
- ・ 擬人化した言葉やうまく言葉が出てこないもどかしさから、泣きわめく姿は、園内の「ことばの教室」の教師と連携をとっていく必要があると感じました。

②保護者に、クラスの中での育ち合いの面と個別指導をして育てていく面の両方を伝える。

→K子さんの保護者

- ・ 私自身「女の子と遊びなさい。」と言ったことで、K子を困らせ混乱させてしまいました。毎日「お母さん、私は今日誰と遊ぶの？」と尋ねるので、これではいけないと思って「K子の好きな友達と遊んでいいよ。」と言い直しました。でも、本心はせっかくクラスに35人もいるのだから、いろいろな子と遊んで欲しいのです。
- ・ 言葉の遅れの方は、ずっと気になっていたもので、お願いします。ことばの教室(うさぎ組)に通級したいです。

- ・ K子さんの気持ちが安定し始め、自分のやりたい遊びを見つけて再び遊べるようになりました。H君、Y君と一緒にごっこ遊びをしたり、女児とお絵かきをしたりする姿ができました。
- ・ ことばの教室に通う事への不安も保護者の側にはありましたが、同じクラスのM子さん、Tさんも通級している旨を伝えると、安心されました。
- ・ K子さんがうさぎ組に通う初日には、母親と一緒についてきてもらって、玄関までうさぎ組の担任も迎えに来てくれ、K子さんも安心できたようです。
- ・ K子さんも、言葉の面で自分の思いを少しずつ伝えられるようになり、自信ができました。同じキティグループのMさんと園庭でセーラームーンごっこをして遊ぶ姿も見られ、そうした姿は毎日母親に報告していきました。

→K子さんの保護者

- ・ 今日K子が帰りに「M子ちゃんの家遊びに行く約束をしたよ。」と話してくれました。ところが、M子ちゃんのお母さんに用事があって行かれなくなってしまいました。以前のK子なら泣いて「イヤだ、絶対に遊びに行く。」と言っていたのに、事情を話すと「うん、分かったよ。」と納得してくれました。成長を感じたひとときでした。

K子さんの保護者は、「先生にお話をして、聞いていただいただけですっきりしました。これで眠れます。」と言われました。この言葉に象徴されるように、何はさておき、保護者の思いをまず十分聞くことが大切です。

個と集団の両方を育てるという点で、園内に併設されていることばの教室の存在を保護者にも知らせました。焦らず、職員集団で支え合って子どもを見ていくようなティームティーチングが大切です。

〈まとめ〉

- ◎子どもの友達関係に親の感情が入ってきたとき、幼児にとってそれは大きな影響を与えます。担任は、園生活における子ども同士の関わりのフォローと同時に、保護者の感情のフォローもしていく必要があります。
- ◎事例〈1〉では、A君の母親が子どもさん一人の母親で、こう思うとずっとそのことを思いこむ、抱え込むタイプであったのに対し、I君の母親は、上の子が中1で子育て経験もありおおらかな性格であったので、このような解決になっていきました。両者のタイプによって、結果は違って来たと思います。母親のタイプをよく見て教師も言葉を選んでいく必要があるでしょう。
- ◎事例〈1〉〈2〉ともに大切なことは、「保護者の気持ちを聞くこと」、「担任として動き出すこと」の姿勢を大切にしつつ、「保護者への報告をこまめにしたこと」です。
担任一人が焦って「何とかします。」と言い、抱え込んではいけません。時には「園長に相談してみます。」という言葉も添えていく必要があります。それが問題解決の早道になるときも多いのです。

